

令和2年度
常葉大学 地域連携事業
実施報告会



常葉大学
TOKOHA UNIV.

(令和2年 9月8日)

発行：常葉大学 地域貢献センター
発行日：令和2年9月8日
URL <https://www.tokoha-u.ac.jp>

常葉大学

■静岡草薙キャンパス
〒422-8581 静岡市駿河区弥生町 6-1
TEL. 054-297-6100(代表)
教育学部 外国語学部 経営学部
社会環境学部 保育学部
大学院 国際言語文化研究科
初等教育高度実践研究科
環境防災研究科
短期大学部 日本語日本文学科 保育科

■静岡瀬名キャンパス
〒420-0911 静岡市葵区瀬名 1-22-1
TEL. 054-263-1125(代表)
造形学部
短期大学部 音楽科

■静岡水落キャンパス
〒420-0831 静岡市葵区水落町 1-30
TEL. 054-297-3200(代表)
法学部 健康科学部

■浜松キャンパス
〒431-2102 浜松市北区都田町 1230
TEL. 053-428-3511(代表)
経営学部 健康プロデュース学部
保健医療学部
大学院 健康科学研究科

目次

常葉大学地域連携・交流推進基本方針 ······ 2

地域交流・連携推進事業 概要 ······ 4

地域交流・連携推進事業（令和元年度 採択事業）

事業 1. 非認知能力を高める保育実践開発プロジェクト ······	6
事業 2. 静岡市の東静岡にぎわい創出事業への支援 ······	8
事業 3. 発芽玄米を用いた蒸しパンの血糖値上昇抑制効果の検証と 常葉オリジナル商品開発の検討 ······	10
事業 4. 地域特産品を利用した常葉オリジナル商品の開発 ······	12
事業 5. 天竜浜名湖鉄道の沿線活性化を目指した旅行周遊プランの造成と実践 ······	14

学生による地域連携活動（事例報告）

事例 1. 「銀ぶらマルシェ」にて「子どものあそび広場」を企画しました ······	18
事例 2. 七夕バザールに出店しました ······	19
事例 3. 学生が学びとワクワクを提供！キッズオープンキャンパス開催 ······	20
事例 4. 産学官連携による地域貢献事業 「静岡浅間通り商店街フィールドワーク」を実施しました ······	21
事例 5. とこは未来塾—TU can Project : 三保松原-清水港のフィールド調査を行いました ······	22
事例 6. ミナトブンカサイが開催されました ······	23
事例 7. 学生ボランティア組織「ココスタ」が学内でフードドライブ実施 ······	23
事例 8. 地域の方の健康増進のために「北区☆健康フェア」開催 ······	24
事例 9. VELTEX 静岡ホームゲームにて防災ブースを出展 ······	25
事例 10. 「とこは Web 通信 ー新型コロナウイルスを考えるー」の掲載 ······	26

常葉大学地域連携・交流推進基本方針

〔平成 27 年 12 月 14 日制定〕

1. 地域連携・交流の基本理念

常葉大学（以下「本学」という。）の 3 つの教育理念（知徳兼備、未来志向、地域貢献）の実現に資する「ナショナル～ローカルな次元」の地域連携・交流にかかる諸活動を積極的に支援・推進することを通して、「美しい心情をもって、国家・社会・隣人を愛し、堅固な意志と健康な身体をもっていかなる苦難にもうち克ち、より高きを目指して学び続ける」（常葉学園「建学の精神」）人間像の具現化を図るとともに、地域社会の活性化・進展に資するものとする。

2. 地域連携・交流の目的

本学が取り組む地域連携・交流は、地域社会の動向やニーズを的確に捉えて、地域社会の人的基盤を支え、地域社会や地域経済の発展等に寄与することを目的として、次に掲げる事業等を展開する。

- (1) 地域の活性化等を担う人材の育成
- (2) 地（知）の拠点としての大学の役割・機能の発揮
- (3) 本学の資源を活かした地域社会に対する協力・支援
- (4) 産官学連携による地域連携・交流事業の展開
- (5) 地域連携・交流に関する学内の機運醸成

3. 地域連携・交流の基本原則

本学が取り組む地域連携・交流は、以下の諸原則のもとで行うものとする。

- (1) 効果性：本学の 3 つの教育理念の実現に対し効果的であると認められるもの
- (2) 組織性：全学的ないし学部・学科等の単位で組織的に実施するもの
- (3) 計画性：中長期の展望のもとで計画的に事業を実施するもの
- (4) 公平性：交流事業への参加の機会が学生・教職員に平等に開かかれていると認められるもの
- (5) 互恵性：連携先と互恵的な関係性のある事業を実施するもの

4. 地域連携・交流の事業内容

本学が取り組む地域連携・交流の事業内容は、次のとおりとする。

- (1) 地域の活性化等を担う人材の育成
 - ① 地域人材の育成のためのカリキュラム・授業内容の充実
 - ② 正課内外での地域貢献活動の実施

- ③ 学生の地域での就労促進
 - ④ 卒業生に対する継続的な学習機会の提供
- (2) 地(知)の拠点としての大学の役割・機能発揮
- ① 教育研究成果の情報発信及び成果還元
 - ② 多様な学習機会の提供
 - ③ 社会への提言活動
 - ④ 学生の人的資源の活用
- (3) 産官学連携による地域連携・交流事業の展開
- ① 共同研究(商品開発等)の実施
 - ② 地域課題解決のための共同事業の実施
 - ③ 起業及びベンチャービジネス等への支援活動
 - ④ 地域活性化のためのイベント・実践報告会等の実施及び支援
- (4) 地域連携・交流に関する学内の機運醸成
- ① 実践報告会・シンポジウム等の開催
 - ② 実践事例集の作成・刊行
 - ③ 研究推進、教育改善等に対する連携・交流事業の効果検証

5. 地方自治体、各種団体等との連携・交流協定の締結

地域の特性及びニーズに応じた地域連携・交流事業を展開するため、地方自治体、各種団体等との連携・交流協定の締結を促進する。

6. 自己・外部資金を活用した地域連携・交流事業の実施

本学の専任教職員が基本理念・基本原則に沿った地域連携・交流活動を主体的に推進することができるよう、学内における助成金の交付、外部資金への応募を促進する。

7. 地域連携・交流にかかる推進組織及び環境整備

- (1) 地域連携・交流の充実及び円滑な推進等を図るための学内体制を構築する。
- (2) 地域連携・交流事業の充実を図るため、学内外の関係者から成る連携推進組織を整備・運営するなど、連携推進体制及び環境の構築を進める。

地域交流・連携推進事業 概要

本事業は、本学の教職員が個人およびグループで地域住民や関係機関等と連携を図って地域との交流・連携事業の取組みに対して支援（所要経費の一部を交付）をするものです。

助成要件及び条件

地域の活性化又は発展に貢献又は寄与するもののほか、次のすべてに該当し、大学としてのメリット又は効果があると認められるものに対して助成をする。

- (1) 事業の効果が本学の教育・研究に反映若しくは還元されるもの又は地(知)の拠点である大学として相応しいと認められるもの
- (2) 本学が主体性をもって実施するもの（単なるボランティア活動又は行事への協力は対象外とする。）
- (3) 一過性のイベントや行事ではないこと
- (4) 地方自治体、民間企業・団体又は地域団体等から資金、人的な支援又は協力等が得られるなど、地方公共団体等との共同又は連携が明らかであるもの

助成対象事業

次のいずれかに該当する事業に対して助成をする。

- (1) 地方自治体及び民間団体等と共同又は連携して、地域活性化等を図ることを目的として実施する事業
- (2) 本学の研究成果等を地域に還元又は情報発信（成果の報告又は発表等）することを目的として実施する事業
- (3) 産官学（産学又は官学も含む。）連携により地域や産業の活性化等を図ることを目的として実施する事業
- (4) その他学長が特に認める事業

交付対象金額

1 事業に対して、原則として 500 千円を上限とする。

地域交流・連携推進事業

～令和元年度 採択事業～

1

非認知能力を高める保育実践開発プロジェクト

事業担当者

保育学部保育学科 山本睦教授、長田真穂(代表)、阿部萌、大谷優里、加藤眞子、宮田千理、原田莉子、長田栞奈、依田紗南、前島亜美、望月優花、田中千愛、西村悠、村松花帆、杉山和、杉本早弥、大石奈々海、海野明日香、金子真弓、梅田美咲

目的・概要

昨今、保育現場で園児の「非認知能力」の育成に関心が高まっている。「非認知能力」とは、情動のコントロールや最後までやり抜く力など、学びに向かう力の基礎となるものである。この非認知能力の育成・指導案の作成に保育者と学生とが協働して取り組むプロジェクトとなっている。本プロジェクトは、新要領・指針で求められる学力観をいち早く実践に取り込むことや、研修や講義だけでは困難な「理論の実践への落とし込み」を目的としている。

事業内容・方法

	学生	保育者	実施日
4月	非認知能力、調査法 基本文献読み込み	園内参加者決定	
5月			
6月	第1回指導計画会議準備 担当園決定 指導計画/記録表作成	プロジェクト実施日調整	
7月	第1回指導計画会議		7/20(土)
8月	評価基準の設定	各園で具体的計画 実施要綱作成	各園で打ち合わせ
9月	実践を撮影	指導計画に基づき実践	各園で実施
10月	分析		
11月	第2回指導計画会議		11/2(土)
12月	実践を撮影 分析 報告書作成	指導計画に基づき実践	各園で実施
1月	報告書完成 成果報告会準備		
2月	報告書配布	成果報告会準備	
3月	成果報告会		3/27(金) 中止

本事業では、県内5つの園と学生が協働し、アクションリサーチを用いて「非認知能力」を育むための介入方法を以下の順で行った。

- ① 第1回指導計画会議で、学生が5つの非認知能力の理論と提示し、各園でターゲットとする非認知能力を選択する。
- ② 各園で非認知能力を育むための指導計画を作成し、実践を行う。学生は実践を撮影し、その効果を測定する。
- ③ 学生は実践効果を園にフィードバックし、園と協働して新たな実践を考える。
- ④ 実践結果を踏まえ、指導計画を再検討し、2回目の実践を行う。学生は実践を撮影し、その効果を測定する。
- ⑤ 2回の実践による効果を最終成果としてまとめ、報告書を作成する。

また、本研究を以下の3つの観点から分析し富士山麓アカデミック＆サイエンスフェア2019においてポスター発表を行った。

- ① 保育者効力感の変化～非認知能力開発実践を通して～
- ② リズム運動と子どもの集中力の関係性
- ③ 未就学児における言語的説得の問題

事業成果

県内5園での実践結果は様々であった。これに加え、本事業全体の成果として実践のための指導計画書と実践結果についての関連性を検討した。その結果、伸ばしたい非認知能力に合わせた到達基準がたてられているかどうかという点で実

園名	到達目標が書いている		到達基準が書けてる	
	1回目	2回目	1回目	2回目
富岡保育園	○	○	○	○
深良幼稚園	×	○	×	○
くるみ幼稚園	×	○	○	○
原町幼稚園	×	未回収	×	未回収
原町保育園	○	未回収	○	未回収

实践結果に違いがみられた。1回目の実践時からターゲットとなる非認知能力と合致している場合、最終実践時で子どもたちに実践効果が表れていた。このような結果から、子どもたちに保育の効果が期待できる活動にするためには、活動のねらいに合わせた到達基準を明らかにしたうえで保育実践を行う必要性が考えられる。

今後の展開

新指針、要領で新しい学力観として求められる非認知能力の育成は、今後更に保育者が説明責任を果たさなければならぬものとなっていくことが考えられる。そのため、今回のプロジェクトの効果を視覚化するという経験はこれからの保育所、幼稚園実習での指導案の作成等にも活かすことができるものである。今後の学生生活でまた更に学びを深めていきたいと考えている。

事業担当者

教育学部生涯学習学科 堀切正人（代表）、教育学部生涯学習学科 白木賢信

教育学部生涯学習学科 鈴木守、教育学部生涯学習学科 田井優子、教育学部生涯学習学科 那珂元

目的・概要

本事業は、静岡市からの要請に応え、東静岡駅北の市有地「東静岡アーツ＆スポーツ／ヒロバ」のにぎわい創出事業を支援するものである。本学学生の発想力と行動力を、市政の重要課題の一端に活かすこととする。

静岡市は、「第3次静岡市総合計画」において、中心市街地の活性化を市政の重要課題とし、その拠点として静岡・清水両都心とともに、東静岡副都心を挙げている。そこで長年活用案が定まらず空き地となっていた東静岡駅北口市有地を「文化・スポーツの殿堂」として振興することとし、平成29年にはその取り組みの第1弾として、敷地内的一部にローラースポーツパークが開業した（指定管理による民間業者への委託）。しかしながら、広大な芝生広場は手つかずで、活性化には程遠い状況である。市としてはこの地のさらなる利活用を目指して、多様な事業やイベント企画を模索しているところである。そこで、本事業は、若者ならではの発想力と行動力で、市民対象のワークショップイベントを開催することにより、にぎわいを創出し、もって大学として地域課題に貢献しようとするものである。平成30年度に採択され、本年は2年目となる。



現場と実施状況の全体写真（2019.12.14）

事業内容・方法

「東静岡アーツ＆スポーツ／ヒロバ」の事業を所管する静岡市まちは芸術推進課、および関係する静岡市文化振興財団等と連携しつつ、当地を会場とした一般市民対象の創作ワークショップを、学生が企画し、実施する。その概略は、まず市関係部署と連絡を取り合い、ヒロバ全体の年間スケジュールを調整し、イベント実施日を確定した。一方、大学内では、教育学部生涯学習学科と造形学部の博物館実習生を中心とした学生15名を募り、現地見学、企画案提出、実施体制・スケジュールなどの立案作業を行った。市ほかとの企画調整会議を経て企画を決定し、教員監督のもと、学生の手により事業を実施した。

ワークショップの内容は、「にぎわい創出」を目的に、できるだけ多くの一般市民が誰でも自由に参加できるものとし、そのために申し込み不要、参加料無料、参加年齢の制約なし、開催時間内の自由参加といった、参加しやすい実施方法を取った。具体的には、芝生広場全体を使って、ライン引きによる富

土山の描画と、その上に巨大シャボン玉を作つて霞をたなびかせるものとなつた。また前年度の反省を生かし、雨天でも最低限の実施ができるように、併設のコンテナギャラリー内で、糸引きアートで富士山ほかの図形を描く室内イベントも新規に用意した。イベント名も学生たちに案出させ、「せんひきうおーく巨大な富士山を描け！」に決定。広報しづおかに情報掲載してもらうなど、広報活動も前年度以上に取り組んだ。

12月14日（土）、午前9時現地集合、準備。午後1時～4時、イベントを実施。一般参加者は95名（前年度より22名増）。午後5時より片付け、撤収。1月、学生による反省会を行い、市関係部署への実施報告と挨拶を行つた。



実施状況(2019.12.14)

左：ライン引き、中：シャボン玉、右：糸引きアート

事業成果

12月の閑散期90名を超える一般市民を集客でき、東静岡のにぎわい創出に寄与できたものと思われる。一般参加者にとっては、広い敷地に存分にラインを引いたり、大きなシャボン玉を作つて飛ばすなど、簡単でかつ楽しい作業ができたため、老若男女、満足いただけたようである。

静岡市にとっては、人口減とりわけ若者の県外流出が深刻化し、その対策が重要課題である状況下において、若者の参画は将来に向けて意義があったと思われる。

本学の学生にとっては、地域貢献、生涯学習の実践の場として、座学だけでは学べない多くのことを体験できる機会となり、大きな教育的效果があった。反省会では、準備や各班の連携についての反省や、広報・誘客の難しさについての意見とともに、企画から実施までをやり遂げた充実感も報告された。

今後の展開

東静岡の市有地の活用方法について、令和元年冬、多目的アリーナ建設の調査費が予算計上された。しかしコロナ禍による諸事業凍結もあり、令和3年度以降の方針は未定ある。このことは、何もない芝生広場が、当面存続することを意味し、その状況下において実施可能なにぎわい創出が、市の懸案として継続されることを意味する。

その要請に対して、たとえば企画業者などへの事業委託で大型イベントを誘致し、一過的に大量動員をはかるような方法も考えられようが、地域住民や学生とによる地道で継続的な活動こそがより必要であるとも思われ、本事業の有意義性はさらに高まると予想する。

なお本事業は、令和2年度の同事業にも申請し、採択された。平成30、31年度の成果や反省、課題は今年度へ活かしたい。様々な内容のワークショップが立案可能である。学生たちは先輩の活動を踏まえて、よりよいものを目指そうとするだろ。そのような継続性、発展性も、本事業の可能性の一つである。

3

発芽玄米を用いた蒸しパンの血糖値上昇抑制効果の検証と常葉オリジナル商品開発の検討

事業担当者

健康プロデュース学部 健康栄養学科 池谷 昌枝

目的・概要

発芽玄米は血糖値上昇抑制効果、腸内環境の改善、良好な便通を促すなど、多くの健康増進に役立つ効果が認められている。本学浜松キャンパスの近郊に製造工場を構える『(株) 発芽玄米』では玄米を独自の技術で加工しており、従来の玄米の問題点であった炊飯時間の長さや硬さ、ぱさつきなどが改良されていることが特徴的である。また、商品種類も豊富であり古代米ブレンドや、 α 化かつ微粉末化したもの、フレーク状に加工し加熱時間を短縮させたものなど汎用性も高い。これらの商品は(株) 発芽玄米の HP においても紹介されているものの、ヒトに対する健康増進効果を言及するには至っていない。そこで本事業では(株) 発芽玄米社製の発芽玄米を用い、食後高血糖の上昇抑制効果が認められるかについて検証し健康増進に役立てたいと考えた。対象食品を蒸しパンとした理由は、申請者が兼務する内科クリニックの糖尿病患者における栄養指導経験から簡便性、安価、パンへの嗜好性と依存性により朝食や間食でパンを利用する人が多いことから、商品としてのニーズが高いと推察されたためである。しかし、一般的なパンは精製された小麦粉に加えて脂質や糖分も多いため、血糖値の急上昇が懸念される。同時にパン焼成時の高温加熱により終末糖化産物である AGE (advanced glycation endproducts) が老化を促進させる可能性もある。そこで本研究では、健康増進効果の高い玄米を利用しつつ、100°C以下の低温加熱で作成できる蒸しパンに焦点を当て、血糖値上昇抑制効果を検証することを目指した。血糖値上昇抑制効果が認められた場合は、常葉大学と(株) 発芽玄米との共同でオリジナルの蒸しパンとして発展させ、商品化への検討をすすめたいと考える。

事業内容・方法

1. 発芽玄米の炊飯による物性調査：(株) 発芽玄米の商品である①古代米ブレンド、②柔らかソフト、③ α 化発芽玄米粉、④半生発芽玄米フレイク、古代米ブレンド、⑤半生発芽玄米フレイクを標準炊飯し、物性特徴の確認と蒸しパンへの適合性が高いものについて検討した。
2. 玄米（粒）と玄米（粉）、難消化性デキストリンを配合した蒸しパンの試作と試食：1での検討結果を踏まえて古代米フレイクと α 化発芽玄米粉を混合した蒸しパンを試作・試食した。試食は健常者と糖尿病患者で実施した。また、商品化後の流通を考慮して冷凍保存・解凍後の物性も評価した。
3. α 化発芽玄米粉と難消化性デキストリン配合の蒸しパンの試作と試食：米粒は使わず玄米粉だけの蒸しパンを作成し、5種類の味のバリエーションの検討を行った。
4. 大量生産に向けての検討：オリジナル商品として開発するためには大量生産が必要となる。そこで、

浜松市の和菓子店（グーこぎく）に協力を依頼し、工場生産ラインでの作成を検討した。

5. GR (Glucose Releasing Rate) の測定：ヒトを対象とした GI 値測定の前に *in vitro* での血糖上昇予測が有意義だと考え、大量生産予定の試料（グーこぎく工場で作成）を用いて GR を測定した。

6. 2019 年 12 月に 5 の成果を日本病態栄養学会に投稿し、現在査読結果待ちである。論文成果を事業者と共有し大量生産及びヒト試験へと発展させる予定。ヒト試験は 2020 年度個人研究として実施予定。

事業成果

【1・2 の結果】5 種類の商品のうち蒸しパンの使用に適するものは③ α 化発芽玄米粉と④半生発芽玄米フレイク古代米ブレンドであると評価した。古代米は赤飯のような色と味、プチプチとした食感を出すことに役立ち、嗜み応えのある蒸しパンとなった。難消化デキストリンの配合によりパサつかず、もっちりとした食感を作り出すことができた。冷凍後の解凍では自然解凍でも良いが、電子レンジなどによる再加熱で、弾力があり美味しく食べられることができた。（図 1）

【3・4 の結果】味のバリエーションとして、青のりと桜エビ、米ぬかとコーヒー、みかん粉末、ねぎ味噌、鰹節と紅ショウガの 5 種類を試作した。試食の結果、青のりと桜エビ、米ぬかとコーヒーが高評価であった。（図 2）これらをグーこぎくの商品開発担当者とともに大量生産と商品化の検討を行った。その結果、消費者の嗜好性やコスト、生産作業の制約などから形状と味を変更することになった。蒸しパンの上部に食材を乗せずにフレーバーとして生地に味をつけることとなり、紅茶、抹茶、レモンの味が提案され、商品サンプルとして制作された（図 3）。これらは糖尿病患者にも試食され高評価を得た。

【5・6 の結果】4 で作成した工場生産された蒸しパンを試料とし、白米や食パンなどと比較しながら GR を測定した。その結果、4 の試料の GR は白米よりも低く、食後高血糖上昇の抑制に有効である可能性が示唆された。現在はこの成果を論文として投稿しており、1 回目の査読が終了し、修正後の結果待ちの状態である。

（図 1）古代米入り



（図 2）5 種類の味



（図 3）レモン・抹茶・紅茶



今後の展開

2019 年度ではヒト試験の前に *in vitro* 実験を入れて GR を測定し、食後高血糖の抑制に有効である可能性を見出すことができた。2019 年度ではヒト試験までの発展ができなかったため、2020 年度では個人研究として、商品化予定の蒸しパンを使った食後血糖値の変化を検証する予定である。その後、糖尿病患者を対象とした血糖値上昇についても検証し、疾病を持つ方々にも安心して利用できる常葉オリジナル蒸しパンへと発展させていきたい。

4

地域特産品を利用した常葉オリジナル商品の開発

事業担当者

健康プロデュース学部 健康栄養学科 杉浦 千佳子（代表）

健康プロデュース学部 健康栄養学科 児山 左弓

浜松地域貢献課 松岡孝江

目的・概要

常葉大学健康プロデュース学部健康栄養学科は、栄養や食を基盤とした健康増進の担い手としての役割を果たす管理栄養士を育成しており、ライフスタイルに合わせた食と健康増進についての学修を目指している。本学科が備える教育と研究力という知的財産を基に、浜松市の食育推進計画にある若者の野菜摂取不足解消と、地産地消という観点を踏まえた新しい商品を考案することで、地元野菜や果物に関心を持っていただくと共に健康への意識づけを図りたいと考える。また、近年、各大学では地元企業ブランドとのコラボという手法で様々なオリジナル商品を開発し、地域に根差した活動を行っている。これらの開発商品は、大学の広報活動や地域との交流において活用され、商品の販売を通して、本学への関心を高める手法として大いに役立っている。しかしながら、現常葉大学では、地域社会に継続的に発信できる独自のアイデア商品に乏しいのが現状である。

そこで、本事業では、常葉大学「健康栄養学科」の健康をイメージした商品を、素材や手作りにこだわる地元洋菓子店「モンターニュ」と野菜や果物を栄養価の高いパウダー製造技術をもつ「浜松ベジタル株式会社」と共同で、産学連携という話題と PR を兼ねた持続的に注目される商品開発を行うことを目的とする。

事業内容・方法

1. 地域特産品を利用した焼き菓子（クッキー）のオリジナル商品の試作

焼き菓子（クッキー）は、保存期間が長い、幅広い年代に愛される、素材にこだわることができる、低価格で提供できるなどの点に優れ、商品開発しやすいお菓子である。健康栄養学科の学生アイデアを元に、地元企業の協力を得て試作を行った。

2. オリジナルクッキーの商品化の検討



＜学生考案によるクッキー試作品＞

学内試食会において教職員 28 名、キトルス祭（浜松キャンパス大学祭）と「産業振興フェア in いわた」において地域住民 255 名、169 名を合わせた 452 名を対象に試食アンケート調査を実施した。その結果をもとに試作品を評価し、商品化をするクッキーを決定した。

3. 試行販売の実施

令和 2 年 3 月 14 日常葉大学浜松キャンパス卒業式において販売（100 個）を実施した。

事業成果

1. 地域特産品を利用した常葉オリジナルクッキーの商品化

常葉大学健康プロデュース学部健康栄養学科の学生が、健康と安全性、食材の特性や原価率算定などこれまで習得した知識を生かしてレシピを考案した。学生と地元洋菓子店「モンターニュ」、地元企業「浜松ベジタブル」とが連携することにより、それぞれの知識や技術を活用した常葉大学オリジナルクッキー（いちご・みかん・ほうれんそう・かぼちゃ・じゃがいもの5種類）を開発することができた。学生考案レシピの商品化には、大量生産する場合の製造方法、価格、安定した品質や味の保証などの問題があったが、学生と「モンターニュ」菓子店との間で、より良い商品を実現化するための意見交換を活発に行い、「モンターニュ」の製造技術の助けにより、商品の改良を行うことができた。学生は、工場で大量製造する場合の商品開発の難しさを経験し、教育研究的成果を得ることができたといえる。

2. アンケート調査結果

多くの地域住民の方に協力を得て、幅広い年齢層の方に試食アンケート調査を実施することができた。参加者は、常葉大学健康栄養学科の学生が考案し、地元の有名店である「モンターニュ」が製造のクッキーであることや、「浜松ベジタブル」の独自技術による地元特産品を使用した微粉末パウダーの風味が他にはない商品であると関心を持ってくれた。また、健康栄養学科の特色を生かした商品として、地元野菜を使用した無添加で健康・安心・安全という商品つくりにも共感を示してくれた。みかんやいちごなどイメージが湧きやすい果物を使用している甘いクッキーの人気が高かったが、野菜を使用したクッキーは野菜本来の甘みや風味を感じられるとの意見も多くあった。今後、常葉大学オリジナル商品としての定着化を図ることで、地元野菜への興味、野菜摂取の大切さを知るきっかけになることを期待したい。

3. 常葉オリジナルクッキーの試行販売

常葉オリジナルブランド「**「とこはクッキー」**として試行販売を実現した。試行販売を実施するまでに至ったことで、参加した学生は、健康栄養学科で学んだ栄養学の知識を実際の商品化に生かすという実践的プロセスを学ぶことができ、大きな収穫を得ることができた。商品販売実施するにあたり、販売価格、パッケージなどについてはさらに検討が必要であること、素材へのこだわりと販売価格のバランスや消費者に選ばれるためのセルスピントの重要性などを認識することができた。



＜試行販売「とこはクッキー」＞

4. 事業成果の情報発信

新聞やテレビ、大学ホームページにも報道されることで地域住民や学生への情報提供ができ、地域の特産物への理解を深め、野菜摂取の必要性や健康に対する意識を啓発するよい機会となった。本学健康栄養学科が、健康や安全性を重視した商品づくりを進めた地元企業とコラボ商品に、常葉大学というブランドを活用することで大学の広報の一翼も担うことができると実感できた。

今後の展開

本事業において開発したオリジナル商品を、素材にこだわった、からだにやさしいクッキーとして定着を図るため、商品パッケージの開発とチラシ作成に取り組みを検討したいと考えている。また、HPでの紹介を行い、常葉大学ブランドとして持続性のある商品の利用と促進を目指す。

天竜浜名湖鉄道の沿線活性化を目指した旅行周遊プランの造成と実践

事業担当者

村瀬 慶紀（研究代表者：経営学部経営学科講師）、佐野 準（浜松地域貢献課副主任）

古橋 祐基（経営学部経営学科4年）、渡辺 竣也（経営学部経営学科4年）、

新山 仁美（経営学部経営学科4年）、佐藤 優成（経営学部経営学科4年）

目的・概要

本事業は観光の視点から天竜浜名湖鉄道の魅力を再発見し、沿線の活性化につなげることを目的に、学生が主体となって旅行プランの造成に取り組むことが目的である。その成果は天竜浜名湖鉄道の方々に報告し、評価が高かったプランは実際に車両を貸し切って、旅行ツアーとして商品化した。商品化されたツアーは、学生が主体となってオペレーションを行い、旅行商品の企画・造成からツアーの実践までの流れを経験し、リアルビジネスを通じた学生教育の質的向上及び沿線の魅力度向上に寄与した。

事業内容・方法

2019年4月より同事業がスタートし、5月には天竜浜名湖鉄道営業課の方から趣旨説明と旅行ツアーを造成する際の注意点に関する講義を受けた。学生は定期列車のタイムテーブルに合わせて貸切列車のダイヤを組むこと、ツアーを催行できる最少催行人数の設定、旅客車両で出来ること等の制約について理解を深めた。最終的に学生は3グループに分かれて、観光ガイドブックやパンフレット等を参考に現地調査を行い、各班でゼミの授業時間を活用しながらツアーの原案を作成した。

8月には各グループの原案をもとに、天竜浜名湖鉄道の方々をお招きし、「中間報告会」を開催した。

報告会では3つの原案が示されたが、タイムスケジュールの現実性、商品としての魅力、集客方法など各グループで課題が残り、メンバーは再び調査を行ったり、修正や変更を求められた。その後は天竜浜名湖鉄道営業課の方が各グループのメンバーに対してアドバイスを行う機会を設け、より現実的な商品化に向けて作業が進んでいった。

12月の「成果報告会」では最終的に3つの旅行商品（餃子を食べるだけでなく、老舗餃子店の店主による講演会や餃子製造工場の見学を取り入れた「浜松餃子列車」、静岡県内の地酒7銘柄をクイズ形式で楽しみながら飲むことができる「利き酒列車（日本酒の銘柄当てクイズ）」、そして鬼のお面を作成し、降車後にみんなで豆まきを行う「鬼退治豆まきトレイン」）が提案された。その後、天竜浜名湖鉄道の方に審査をしていただき、最終的には「鬼退治豆まきトレイン」が旅行商品として販売されることが決定した。既述のとおり、本事業は学生が添乗員となってツアーをオペレーションすることから、準備には多くの時間と労力（商品化に向けた最終調整、支出予測、チラシ製作や広報宣伝等）が予想され、企画したグループに他のグループが協力する形で当日に向けた役割分担がなされた。

常葉大学経営学部村瀬ゼミ×天竜浜名湖鉄道コラボ企画

『天浜でGO！ 鬼退治豆まきトレイン』



当日は晴天にも恵まれ、お子様連れの家族を中心に約20名を乗せ、掛川駅を出発した。車内では、節分に関する豆知識の紹介やクイズ大会、鬼のお面づくりなどが行われた。途中、原谷駅から学生が扮した鬼が登場するサプライズ等もお客様を楽しませるために考案した。

天竜二俣駅に到着後は、同駅で開催されている『洗って！回って！列車でGO！』のツアーに参加し、電車の洗車機体験、転車台乗車体験、そして鉄道歴史館を見学した。昼食後はメインイベントである豆まきと、浜松市マスコットキャラクターの出世大名家康くんと出世法師直虎ちゃんも交えた記念写真撮影会が行われ、最後にお菓子の抽選会も開催された。

▲鬼退治豆まきトレインチラシ



▲ツアーの最終調整の様子



▲当日のツアーの様子（1）



▲当日のツアーの様子（2）

事業成果

地域社会への貢献としては、天竜浜名湖鉄道沿線の魅力を学生ならではの新しい視点で発信するきっかけとなり、参加者の方にも一定の満足度を得ることが出来た。

教育への貢献としては、単なる調査、提案のみならず、実践までの責任を担う新しい形での学修プログラムの試みが行われ、学生は日頃の勉学はもちろんのこと、キャリア形成にも良い影響を与えた。

今後の展開

天竜浜名湖鉄道と本学浜松キャンパスの連携事業は、花のリレー・プロジェクトの関連事業や観光マップ（自転車で巡る「ゆったりのんびり天浜線ポタリングマップ」）の共同製作など、多岐にわたっている。今後は各学部の特徴を生かすことのみならず、学部横断型のプロジェクトを企画することによって、大学の資源を地域に還元し、同時に学生の学びにも寄与することが期待される。

＜その他＞本事業の活動が下記の報道機関において取り上げられた。

○静岡新聞 2019年12月12日号朝刊掲載、2020年1月30日号朝刊掲載

○中日新聞 2019年12月25日号朝刊掲載

○大学新聞 3月号（177号）（発刊日：3月12日（木））

○浜松ケーブルテレビ「ウィンディニュース さんちょく」（2月4日（火曜日）10時00分から）放映。

学生による地域連携活動

～事例報告～

「銀ぶらマルシェ」にて「子どもの遊び広場」を企画しました

保育学部村上ゼミでは、「子どもと保育の未来空間」プロジェクトの一環として、6月16（日曜日）に、清水駅前銀座アーケードにおいて毎月開催されている「銀ぶらマルシェ」にて、「子どもの遊び広場」を企画しました。4年目となる今年も昨年同様に、「光のまち」「不思議なステージ」「らくがき広場」の3コーナーをつくりました。今年度は、1年間に3回を予定しており、毎回、各コーナーを少しづつ発展させていくことが課題になっています。

当日は、0歳から小学生まで、幅広い年齢の子どもたちが保護者とともに遊びに来てくれました。「光のまち」で、30分以上、集中して積木で遊んでいる子ども、「不思議なステージ」では光の変化を感じている0歳児など、子どもたちは思い思いに、保護者に見守られ遊んでいました。学生にとって、子どもが遊ぶ姿を観察し、ときに一緒に遊び、さらに子どもになったつもりで自ら遊び、保育者を目指すうえで貴重な機会になりました。

今後も、本学の理念のひとつである「地域貢献」の実現を目指して、保育・育児という観点から貢献していきたいと考えています。なお本プロジェクトは、「2019年度どこは未来塾-TU can Project」の一環として、また富士宮市及び富士宮市教育委員会の後援のもとに行われています。



子どもと保育の未来空間プロジェクト2019
(東京大学保育学部村上ゼミ)

子どもの遊び広場
6月16日（日）
10:30～15:00
清水駅前商店街

コーナー

不思議なステージ 光を当てると光る魔法の紙で遊べるよ！ どんな色が見えるかな？	ひかりの街 身近な物や おもちゃで街を 作るよ！ どんな街ができるかな？
魔法の紙 光を当てると光る魔法の 紙で遊べるよ！ どんな色が見えるかな？	らくがき広場 大きな紙に 手描きで絵を描くよ！ ペイントもあるよ。
子ども、保護者、保育者、街の人々など、遊びに来て下さい。 遊びに遊びるように、流れでもらって来てることを おすすめします！	

-主催：子どもと保育の未来空間-
東京大学保育学部 村上研究室 TEL/FAX: 03-297-0302 E-mail: child.educare.future@icloud.com

◆ 七夕バザールに出店しました

7月6日（土曜日）に七夕バザールが市民文化会館通り商店街で開催され、ミズオチ交流会がボーリングやスタンプラリー、腕相撲マシーンなど5つのブースを出店しました。今回の七夕バザールは、初めて常葉高校生徒会との協働での実施となり、各出し物の準備やルール決め、当日の流れの確認など準備を2か月以上かけて進めてきました。

当日は天候不良にもかかわらず、たくさんの家族連れでにぎわいました。参加した学生や高校生からは、日頃あまり関わることがない子どもたちと交流することができて、とても新鮮だったといった感想が聞かれました。

次回は10月にわくわくバザールでの出店を予定しており、部長の櫻井允人さん（法学部法律学科3年）は「さらに多くの方々に来ていただけるよう、広報活動にも力を入れていきたい」と今度の意気込みを語っていました。



◆ 学生が学びとワクワクを提供！

キッズオープンキャンパス開催

7月13日（土曜日）に、学生が講座を企画運営する「キッズオープンキャンパス」が、浜松キャンパスで開催され、各学科の学びを活かした22講座に、延べ1,454名の親子が参加しました。

このイベントは、地域の子どもたちの好奇心を育て、夏休みの自由研究にも役立ててもらおうと、本学の社会貢献・ボランティアセンター（HUVOC）が主催するもので、今年で8回目となります。

開始とともに、会場にはたくさんの親子連れが訪れました。

3号館学生ホールでは「光るどうだんごつくり」や「プラバンキーホルダつくり」、人体模型とパソコンを使って、人体について学ぶ「クイズからだゼミナール」等が、各教室では「プログラミング」「カラフルパンケーキつくり」、胃の中の消化の様子を試験管で実験する「食べたらどうなるの？消化の実験」等、日頃の学びを活かした楽しい企画が盛りだくさん実施されました。



◆ 産学官連携による地域貢献事業

「静岡浅間通り商店街 フィールドワーク」を実施しました

7月18日（木曜日）に経営学部須佐淳司准教授とゼミ学生20名が静岡浅間通り商店街を訪問し、商店街の実情を探るフィールドワークをしました。この活動は、商店街活性化を目指す（有）葵煎餅本家とB-nest（静岡市産学交流センター）の連携により実現したものです。

当日は商店街を散策後、静岡浅間通り商店街振興組合事務所にて商店街の課題と解決策について話し合いを行いました。学生は3グループに分かれ、「若年層の商店街への関心を高める」「商店街に人の流れをつくる」「商店街への出店機運を高める」という課題に対して、「浅間神社」というスポットを軸に、いかにして魅力ある商店街とすることが出来るか検討しました。

限られた時間ではありましたが、参加した商店街の役員の方々は学生ならではの新鮮なアイデアに感嘆してくださいました。学生にとっても地域が抱える課題に間近に触れて考えることが出来たことから、大変有意義な機会となりました。なお、今回の成果をもとに、継続して本活動を実施していくことになりました。



◆ とこは未来塾-TU can Project: 三保松原-清水港のフィールド調査を行いました

経営学部 小豆川ゼミ（3年生）は、2019年度 とこは未来塾-TU can Projectに採択され、静岡市の特に清水・三保地区を中心に、新たな関心喚起、観光客の増加を通じた地域活性化に貢献することを目的に活動を行っています。テーマは「三保 いっとう！～世界文化遺産からの招待状～」。

3年生のゼミ生は、7月11日（木曜日）、プロジェクト遂行に重要なみほしるべ（三保文化創造センター）、館内ミュージアムショップを視察し、その後水上バスに乗船して清水港エリアに移動してフィールド調査を行いました。

当日、みほしるべでは、静岡市観光交流文化局 三保松原文化創造センター 吉川主査による館内のご説明をいただき、三保松原の2種類の映像を鑑賞、(株)Otonoの青木代表取締役社長にガイドいただき、2階の展示エリアやミュージアムショップの視察を行いました。統いて水上バスを利用し、清水港エリア、エスパルスドリームプラザへ移動しました。ドリームプラザでは、青木社長より清水港エリアの開発に関する清水みなとまちづくりシンポジウムの説明を頂き、ドリームプラザ及びその周辺での視察を行いました。フィールド調査の結果は、7月18日（木曜日）に、ワークショップを開催し、現状、課題、アイデア創出を行い、全員で共有しました。



◆ ミナトブンカサイが開催されました

ミナトブンカサイが10月14日（月祝）清水港日の出地区にて開催されました。「清水港120周年に、ちょっと先の未来を創造する」をテーマに、地域の遺産である倉庫街を舞台にして、アーバンデザイン・トークセッション、Shizuoka Teaism、ミナトマルシェ、次郎長ツアーなどさまざまなイベントが開催されました。主催は、常葉大学、横浜国立大学ほか計6大学からなるミナトブンカサイ実行委員会で、常葉大学からは造形学部、経営学部から約20名の学生が参加し、企画・運営・デザインにあたりました。また、そこは未来塾のプロジェクトとも連携して、次郎長通り商店街のマップづくりも行いました。

13日（日曜日）は常葉大学の公開講座と連携して、屋内でストック活用の講座を行いました。

14日（月祝）は会場とエスパルスドリームプラザをつなぐスロー・モビリティも運行され、日本平夜市との連携による企画に、多くの来場者を迎えることができました。



（画像クリックで拡大します）



◆ 学生ボランティア組織「ココスタ」が学内でフードドライブ実施

本学浜松キャンパスの学生ボランティア組織「ココスタ」のメンバーは、1月6日（月曜日）～10日（金曜日）の5日間、3号館学生ホールにて、家庭で眠っている食品を集め、食べ物に困窮している家庭の支援をしようと「フードドライブ」を実施しました。

これは、「フードバンクふじのくに」が行っている活動に協力するもので、集めた食料品は行政や社会福祉協議会・支援団体を通じて必要な場所に届けてもらいます。

「ココスタ」に加盟する11の団体の学生が交代で食料品を届けていただける方の対応をしました。

集まったのは、乾麺、缶詰、レトルト食品、調味料、お菓子など。この活動を企画したココスタ代表の渡邉美南海さん（こども健康学科4年）は「5日間という短い期間だったが、学生や教職員の方から多くの食料品を集めることができた。また、学生ホールで実施したことで多くの学生に関心を持ってもらえた。」と話していました。

各団体の活動だけでなく、団体が連携してひとつの活動をするこのような取組を今後、続けていきたいと思います。



◆ 地域の方の健康増進のために「北区☆健康フェア」開催

常葉大学社会貢献・ボランティアセンターは10月5日（土曜日）、「市民のための、北区☆健康フェア」を開催しました。

今年度は、運動不足が問題視されている働き盛りの世代やキッズを対象にした、親子で楽しく運動できるレクリエーションも実施。当日は、健康プロデュース学部の3学科、保健医療学部1学科の学生54名と健康プロデュース活動演習の受講生36名が主体となり行いました。



今年度新たに設けた「ふじ33プログラム」コーナーでは、心身マネジメント学科の学生が、静岡県独自の健康長寿プログラムを説明し、10回立ち上がるのに何秒掛かるかを調べる「立ち上がり」や、目を閉じて片足を上げる「閉眼片足立ち」等を行い、筋力や柔軟性、バランス感覚を測定しました。測定が終わった方には、自宅で簡単にできる、足の筋力を高める運動やバランス感覚を高める運動を紹介、実践し、継続して取り組むことが大切とアドバイスをしました。

そして、トコハアリーナでは「親子でスポーツ」「親子でLet's dancing!!」を開催、子供たちは遊びのなかから、スポーツの楽しさを体感しました。

この企画は年々リピーターも増えており、昨年度よりも数値がよくなつたと喜ぶ方も見られ、地域では定着したイベントのひとつとなっています。今後も地域の方の健康づくりに貢献していきたいと思います。

測定・体験コーナーでは、健康栄養学科、理学療法学科の学生が、骨量、ヘモグロビン量、めまい・立ちくらみ等、さまざまな項目の測定を行い、学生は学習した知識を活用し食生活や運動についてアドバイスをし、健康鍼灸学科の学生は、来場者の腰痛やひざの痛みなどの悩みに応え、ささない鍼を使用したアドバイスを行いました。また、講演では柔道整復学科の真鍋和親助教が、「肩こりや腰痛防止」をテーマに、自宅で簡単にできるストレッチやトレーニングを紹介しました。



◆ VELTEX 静岡ホームゲームにて防災ブースを出展

10月20日（日曜日）静岡市中央体育館で開催された静岡初プロバスケットボールチームVELTEX静岡vs東京八王子ビートレインズ戦にて、健康プロデュース学部と教育学部の学生が協働で防災ブースを運営しました。

VELTEX静岡は、スポーツと防災を中心とした地域貢献活動に取り組んでいます。当日は、バケツリレーの防災イベントも開催されました。また、防災ブースでは、3.11復光キャンドルナイトのメッセージブースと選手のメッセージ展示、防災・減災かるた、非常持ち出し袋をつくろう！などの防災教材を使って楽しく防災を学ぶコーナーを運営しました。

VELTEX静岡は、浜松キャンパス出身の卒業生3名が在籍している地元のチームです。今後も地域の活性化とスポーツ振興のために、地域と連携した取り組みをすすめていきます。



◆ 常葉大学公式サイト内に「 とこは Web 通信 -新型コロナウイルスを考える -」の掲載がはじめました

5月25日（月曜日）から、常葉大学公式サイト内に「 とこは Web 通信 -新型コロナウイルスを考える -」の掲載がはじめました。

新型コロナウイルスのもたらす悪影響は私たちの社会生活のあらゆる面に及んでいます。また、今後の日常生活においても新型コロナウイルスを想定した「新しい生活様式」を実践していくことが求められています。そこで、「新しい生活様式」の実践をしつつ、生活をより豊かなものにするために、大学に出来ることは何かと考えました。そのひとつとして、専門的な知識を活用した情報提供があげられます。

「新型コロナウイルスと共に生きる - ストレス解消（癒し）、免疫力強化、感染防止、暮らしと社会 -」をテーマに多様な学問分野の英知を結集し、新型コロナウイルス禍軽減のために地域の方々に向けて様々な知見を発信していきます。

多くの方にご覧いただけますと幸いです。



「とこは Web 通信 -新型コロナウイルスを考える -」刊行に際して

『新型コロナウイルスと共に生きる

- ストレス解消（癒し）、免疫力強化、感染防止、暮らしと社会 -』

令和2年 5月25日
常葉大学 学長 江藤秀一
短期大学部学長 木宮健二



新型コロナウイルスは、これまで私たちの経験したことのない様々な影響を世界中に引き起こしております。今年の正月、私たちは初詣に出かけ、新年会を開き、いつも通りの年の初めの生活をしていました。しかし、その後、日本でも感染者が徐々に増え続け、4月半ばには一部に発令されていた緊急事態宣言が全国に向けて出されることになりました。この緊急事態宣言は5月26日までにすべての都道府県において解除されることになるようですが、連休中の5月4日、国の専門家会議は新型コロナウイルス感染症の完全終息は望めないことから、今後は「新しい生活様式」を提案してきました。それによりますと、人との接触を極力避けること、会話をしながらの楽しい食事会も控えること、買い物も空いている時間に少人数で行くことなど、これまで私たちにとって慣れ親しんだ楽しい日々の暮らしは、感染症拡大防止の観点から自粛することとされております。この「新しい生活様式」の一部を私たちは緊急事態宣言が全国に出された連休中に経験しました。そのとき、ストレスからくる家庭内暴力（DV）や過飲酒、また休校中の子どもとの接し方など、さまざまな問題を抱えることになりました。今回の新型コロナウイルス感染症の厄介な点は、効果のある薬やワクチンがないこと、感染しても症状の出ない人がいること、それによって更に感染拡大が懸念されることといった、これまでの常識では対応できない点が多々あることです。それでも、私たちがこれまで蓄積した知識や技が無駄であるはずがありません。やがては感染症を抑える新薬とワクチンが開発されて、この新型コロナウイルスの恐怖が取り除かれることになるでしょう。それまでは、私たちは感染防止に努め、自らの免疫力を高め、ストレスをためずに、この新型コロナウイルスと共に生きて行かなければならないようです。

そのような状況の中、この新型コロナウイルスから私たちの命を守るべく、医療従事者の方々は懸命にウイルスと戦っているところでありますが、このウイルスのもたらす悪影響は私たちの日常生活のあらゆる面に及んでいます。日本を含めて世界中が新型コロナウイルスのために苦難を強いられている今こそ、知の拠点である大学がその務めを果たすべきであり、すべての学問分野がこの難局を乗り切るために協力して力を尽くすべきであります。そのような趣旨のもと、人文社会学系、教育・保育系、医療系、芸術系の10学部19学科の専門家を擁する常葉大学と3科を擁する常葉大学短期大学部が共同で、新型コロナウイルス禍軽減のために、「新型コロナウイルスと共に生きる」をテーマとし、「ストレス解消」「免疫力強化」「感染防止」「暮らしと社会」をキーワードに、『とこはWeb通信』として、各分野の専門家がその知見を皆様に発信することいたしました。このWeb通信が皆様のストレスを解消し、免疫力を高め、感染拡大防止に役立ち、私たちの社会と暮らしについて考えるきっかけになることを願っております。皆様、どうぞ今後の記事にご期待ください。

※令和2年8月6日の連載終了まで、全50回分の記事を掲載しました。